

# マイクロ・ブログのコミュニケーションツール としての活用

——中学生を対象とした実践例——

和田 由美子  
河合 勝彦

あらまし：情報通信ネットワークの普及で、ネット上でのコミュニケーションが生徒（中学生）の生活の一部となっているにもかかわらず、教育現場では、情報通信ネットワークを活用したコミュニケーションの教育を重視する傾向があまり感じられない。生徒の言語活動のツールの一つとして、マイクロ・ブログが授業で活用できるかどうかを、我々はオープンソースのWordPressを用いて検討した。

キーワード：コミュニケーション、マイクロ・ブログ、授業、WordPress、オープンソース、  
中大連携

## 1. はじめに

本稿は、中学生がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切に活用できるようになることを目的とした教育・学習活動の実践報告である。こうした学習活動を充実させることは、文部科学省の学習指導要領総則にも示されている [1]。今回の実践は、筆者が研究員として所属する大学との連携および技術的サポートを得ることにより行うことが可能になった。

さて、中等教育現場における ICT<sup>1)</sup> の活用には、デジタル教科書やデジタル教材、電子黒板、タブレット PC、および実物投影機の利用が多くみられるが、情報通信ネットワークを使った事例についてはあまり多く聞かない。その一方、情報通信ネットワークの普及で、社会全体が常にネットワーク上のコンテンツを見たり、インタラクティブなコミュニケーションを行ったりすることが可能な環境になり、われわれの生活の一部になっている。

教育現場では、ブラウザでの検索機能を使用した調べ学習はよく行われているが、コミュニケーション機能を重視した教育はあまり行われていない。さらに、生徒が学校外で LINE<sup>2)</sup> 等のチャットツールを使い、友人同士のコミュニケーションでトラブルとなる事例が最近増えて

---

1) Information and Communication Technology

いる。そして、学校内で教員がトラブルの事後処理をすることが見受けられる。

本稿では、こうした最近の状況を鑑み、情報通信ネットワーク上でのコミュニケーション行為に興味を持っている生徒たちに、我々が Web 上に構築したアプリを用いて、その使い方を実践的に考えさせることや、教員がそうしたアプリをコミュニケーションツールとして使い、効果的な授業を行うことを検討したい。

その環境（アプリ）構築には、誰もが自由に使うことができるオープンソース<sup>3)</sup>の WordPress を利用する [3]。WordPress は、主にブログサイトの構築によく使われるが、その機能を応用してマイクロ・ブログ<sup>4)</sup>を構築する。そして、生徒にこのマイクロ・ブログを体験させることで、その使い方を実践的に学ばせる。さらに、生徒がお互いの考え方を伝えあったり、意見交換したりする学習などに、マイクロ・ブログが有効活用できるかを考察する。それと同時に、教員が授業を行うにあたって、マイクロ・ブログを容易に活用できるかどうかを検討する<sup>5)</sup>。

本稿の構成は次の通りである。まず次章で、実施対象の説明をおこない、次に教員の指示のもとに行う生徒によるマイクロ・ブログ投稿の手順と結果をまとめ、その教育効果について考察を加える。生徒のふりかえりについても資料として加える。そして、最終章でまとめをおこない、今後の課題について述べる。

## 2. 生徒によるマイクロ・ブログ投稿の実践

生徒によるマイクロ・ブログ投稿の実践について紹介する。マイクロ・ブログ投稿の実施時期は 2014 年 1～2 月。愛知県小牧市にある公立中学校でおこなった。実施対象は中学 3 年、計 6 クラス。いずれのクラスも、男女比はほぼ同等、合計人数は約 33 名からなる。

実施の方法は単純ではあるが、まったくの初心者が戸惑うことがないように、入念な段階を踏んでいる。

---

2) 公式サイト (<http://line.me>) の説明によると“LINE (ライン) は、24 時間、いつでも、どこでも、無料で好きなだけ通話やメールが楽しめる新しいコミュニケーションアプリです。”となっている。

3) ライセンスに従う限り、誰もが自由に無料で利用することができるソフトウェア。ソフトウェアの設計書となるソースコードが公開されている。WordPress のライセンスは GPL v2.0 である (<http://www.gnu.org/licenses/gpl-2.0.html>)。

4) 代表的なマイクロ・ブログとしては、Twitter (<http://twitter.com/>) がよく知られている。ブログと違い、投稿の文字数は、140 文字 (ワード) 前後の短い文章に制限されていることが多い。

5) 本稿で説明する実践では、生徒が実生活で体験する環境に近いものを実際にネットワーク上に構築した。一方、そうした環境構築が困難な場合、擬似的な環境を実現するロールプレイング授業を行うという試みもある [2]。

## 2.1 実施方法の手順

実施方法の手順は、以下の通りである。

1. 教員の指示のもと、生徒がパソコンの電源を入れる。
2. 生徒ひとり一人のユーザ ID とパスワードをカード形式にしたものを、教員が生徒に直接配布する。
3. 「カードにはマイクロ・ブログのアドレスが記入されている」ということを、教員が生徒に知らせる。
4. 生徒は、マイクロ・ブログ（WordPress）のサイトにアクセスする。
5. 生徒は、サイトに表示されるログイン画面にユーザ名とパスワードを入力し、ログインを行う。
6. 教員のインストラクションにより、生徒にマイクロ・ブログへの投稿方法を教える。
7. 教員が生徒たちに簡単な質問を与える。
8. 生徒は、その質問に答えるために、マイクロ・ブログを使って投稿する。
9. 教員は、ほぼ全員が投稿を終了させたことを確認する。
10. 教員は、他の生徒の投稿に対するコメント追加を指示する。
11. 生徒全員の活動が一段落したら、教員は生徒にログアウトの指示をして、終了させる。
12. 生徒は、投稿の経験の感想を教員に提出する。

## 2.2 実施環境

学生のマイクロ・ブログ投稿環境について説明する。マイクロ・ブログの構築には、WordPress を利用した。WordPress は誰もが自由に使うことができるオープンソース・ソフトウェアである。不具合への対応を含め利用は自己責任であるが、無料で使うことができる。有償のサポートを行う業者も多いので、金銭的に余裕があるのならば、人的なサポートを付けることも可能である。今回の実践では、筆者のひとりが WordPress サイトの構築とカスタマイズを担当し、もうひとりの筆者がマイクロ・ブログ投稿の実際の現場に立ち会って実践活動を指導・担当した。

WordPress は主にブログ投稿を可能にするソフトウェアとして開発されている。しかし、このブログ投稿という基本的な機能に加え、テーマ<sup>6)</sup> とプラグイン<sup>7)</sup> を使うことによって、特定の見栄えと機能を追加することができる。今回のブログ構築には P2 テーマ [4] を利用し、マイクロ・ブログを実現した。なお、P2 テーマは、WordPress の開発とサポートを行っている

---

6) 主に WordPress の見栄えの変更を可能にするもの。HTML/CSS/PHP からなる。

7) WordPress に追加的機能を与える仕組み。

Automattic 社<sup>8)</sup> の社内コミュニケーションツールとして使われている。同社はこのツールを利用することによって、全世界に散らばるリモートワークの社員と密接な関係を保っている [5]。なお、こうした実社会におけるマイクロ・ブログの使い方を生徒に教えることによって、実践活動に参加するモチベーションを高めることも可能だろう。

ブログとマイクロ・ブログの機能的な違いを簡単にまとめておく。ブログは、記事の投稿・編集画面と記事の表示画面が分かれているが、マイクロ・ブログは、議論の流れが明確になるように、記事の投稿画面が表示画面と一体化している (図 1 参照)。さらに、時系列に記事・日記を綴る通常のブログと違い、マイクロ・ブログはインタラクティブに即時的な投稿を行う。よって、ある程度まとまった文章を載せるブログと違い、マイクロ・ブログは直感的な意見や感情を表現するのに適したツールである。



図 1 WordPress P2 テーマによるマイクロ・ブログの構築 (筆者作成のスナップショット)

8) WordPress の創始者 Matt Mullenweg によって 2005 年 8 月に創立。WordPress のホスティングサービスである WordPress.com 等を運営する。本社は、米国サンフランシスコにある (<http://automattic.com>)。

## 2.3 観察結果

今回のマイクロ・ブログの利用は、実施対象である某中学3年生徒にとって、初めてのネットワーク上のコミュニケーション学習の試みであった。

実施状況を教員の視点からまとめてみる。まず、ログインに戸惑う生徒と、ログイン後にどうしたらよいかわからない生徒に全体が分断された。教員がログインの仕方がわからない生徒の対応に追われている間、ログインできた生徒たちはログイン後のマイクロ・ブログ投稿画面を見ていた。そして、突如として1人の生徒が指示のないままに文章を投稿した。その画面を見ていた生徒たちは、それに同調して、同じ行動をとるものもいた。しかし、それが積極的な行動として、必ずしも良いことに作用するわけではなかった。残念ながら、その指示のないままにされた投稿は、言葉を受け取る相手が目の前に実在して、相手の顔を見ながら発言できるような内容ではなかった。

そうした投稿を見て、自主的に注意する生徒もいたが、ほとんどの生徒はパソコンの画面を傍観するか、もしくは、そうした指示を無視した行為を繰り返す状態が続いた。その投稿は誰に対してのものかはわからないが、学校内であり、授業中であり、授業を受けている生徒が全員見ていることを認識しているものと理解していないようにも見えた。世間一般に不愉快にさせる投稿のような不適切な発言や‘のり’などと重なる点があったように感じる。

今回の実践では、発言の敷居を下げるため、実名ではなく仮名（ニックネーム）を利用した。しかし、誰が発言しているのかわからなくなるため、発言内容が無責任なものになる可能性があり、生徒の賛否が分かれた。ちなみに、無責任な発言を行った生徒達の大部分は、学校の日常生活では、行動の良し悪しや発言の良し悪しが判断できるし、普段は礼儀正しく、授業中には落ち着きがある。ネットワーク上の発言は、対人関係という感覚を希薄にさせるのかもしれない。

最後に、技術的な観点からの感想を加える。WordPressによって構築されたマイクロ・ブログは、投稿方法が簡単で生徒は発言をしやすく、生徒の投稿は、瞬時に画面に同期されてクラス全員が見ることができる。行為に対するレスポンスが瞬時に得られることで、全体的に生徒はこの実践活動を楽しんでいるように感じられた。ただし、指導する側の教員の実感として、WordPressサイトのユーザとしての利用は、日常的にブログを目にする機会が多くなりハードルは高くないが、サーバ（インフラ）側の調整に関しては、ある程度の専門知識が必要であると強く感じる。よって、今回の実践のように、専門技術を持った大学と共同研究を行うことを念頭に、コラボレーションすることも選択肢のひとつとして有力だろう。

## 2.4 結果の考察

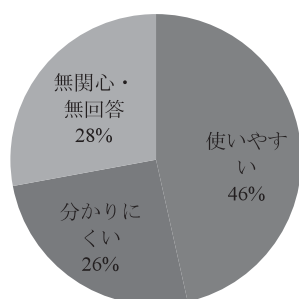


図2 マイクロ・ブログの操作・説明  
(生徒アンケートにより筆者作成)

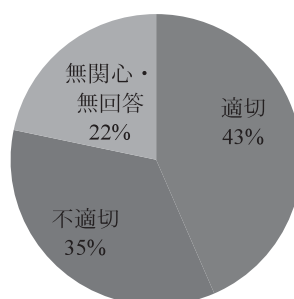


図3 投稿内容の感想  
(生徒アンケートにより筆者作成)

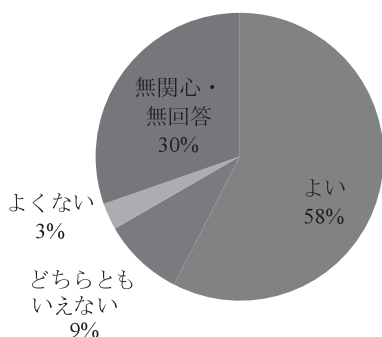


図4 マイクロ・ブログを授業で活用  
(生徒アンケートにより筆者作成)

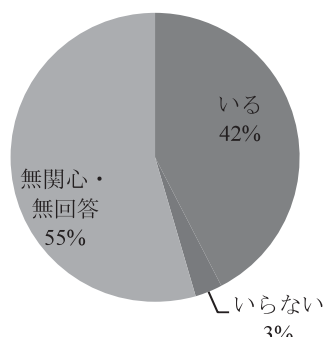


図5 新機能の必要  
(生徒アンケートにより筆者作成)

今回の実践は、生徒約 33 名に対して、教員 1 名の指導で行った。当初、ログインの仕方が分からない生徒や、ログイン後に使い方やルールがわからない生徒たちが多く、生徒たちの戸惑いが大きかった(図2参照)。このことから、より多くのサポート役教員の確保、もしくは利用経験者等によるサポーターの助けをかりた雰囲気作りが必要であると考えた。

生徒がマイクロ・ブログに投稿する際、その投稿が適切であるかどうかは生徒自身も判断がついているようだ(図3参照)。ただし、判断と実際の行動には乖離がある。ネット機器に囲まれて育っている生徒たちは、大人たちよりも感覚的にマイクロ・ブログを使い慣れており、かつそれらを適切に使いこなせると大部分の教員は思い込んでいるが、それは大きな間違いであった。

今回の実践でも観察されたように、不適切な投稿は不適切な投稿の連鎖を呼ぶ。このことから、生徒がマイクロ・ブログに投稿する際に、適切ではない投稿に対しては、そのまましておかないことが重要である<sup>9)</sup>。そのまま放置しておく、それが良いことであると間違った認

識をする可能性が高くなる。マイクロ・ブログの仕組み的なことだけではなく、正しい社会規範を考えさせる必要があるという認識が必要だろう。

マイクロ・ブログの活用は、今回の実践を行った中学における初めての試みであるが、これを授業に取り入れることに関して生徒からは前向きな反応が見られた(図4参照)。また、マイクロ・ブログの活用に興味を持った生徒は多く、新機能の必要性の意見も少なくない(図5参照)。ただし、新機能の要望に関しては、WordPressの機能の強化に関する要望なのか、それとも情報通信ネットワークの使いこなしに関する生徒の旺盛な知識欲の現れなのかを識別して理解する必要があるだろう。

結論として、授業でのWordPressのマイクロ・ブログのコミュニケーション活用は、半分以上の生徒に受け入れられ、新機能の要望に反映された生徒のコミュニケーションツールに対する興味の増大は、大変意義のあることだと考える。

最後に、マイクロ・ブログ活用における技術的な注意点を挙げておく。ユーザ(生徒)による大量の同時アクセスによるネットワーク負荷の増大が原因で、サーバのレスポンスが時々遅くなるため、今回はユーザの投稿頻度に随時制限をかけた。この制限により投稿の共有が間延びし、時折、生徒の不満が表出した。ただし、ネットワーク負荷の分散やチューニングについては、本稿における議論の範疇を超えている。専門家との協議の可能性を含め、今後の検討課題としたい。

なお、マイクロ・ブログ構築に利用したWordPressは、誰でも自由に使うことができるオープンソースであるので、ネットへのアクセス費用を除き、コストの面でのメリットは大きい。また、世界で一番使われているブログ用ソフトウェアであるため、ユーザグループ等の互助意識に基づく、ボランティアベースのサポートが受けやすい。また、汎用的なコミュニケーションツールやコンテンツ管理システム(CMS)として、他のニーズ(ネットワーク上の会議やアンケート)にも転用して使うことが可能なので、教員側の学習メリットも大きいだろう。

表1 生徒のふりかえりの抜粋(生徒アンケートにより筆者作成)

良い点	<ul style="list-style-type: none"><li>●みんなの考えがすぐに知ることができる。</li><li>●自分の意見についてみんながどう思っているかが分かる。</li></ul>
悪い点	<ul style="list-style-type: none"><li>●みんなが変な文章を入力したこと。</li><li>●先生の言うことをあまり聞いていない人もいたこと。</li></ul>
改善点	<ul style="list-style-type: none"><li>●あまりブログについて詳しくないので、よくわからなかった。</li><li>●増やしてほしい機能はないです。</li><li>●ブログは文字を入力するだけなので平気で冗談のつもりで悪口など他人を傷つける人がいると思います。</li></ul>

9) いわゆる「破れ窓理論」との類似性が見られる。詳細な検討については、またの機会に行いたい。

### 3. まとめにかえて

生まれたときからネットワーク機器に囲まれているデジタルネイティブ世代の中学生であっても、感性だけでネットワーク上でのコミュニケーションが可能になるわけではない。よって、授業を通して、コミュニケーションツールの使いこなしを実践的に学ぶことの意義は大きい。その一方、教員は、新しいコミュニケーションツールとしての情報通信ネットワークの可能性を探究し、かつ必要があればその活用技術を習得し、それと同時に生徒理解のためのコミュニケーション力の向上を目指していかなければならない。

今後の課題を挙げておく。今回の実践は、事前実施計画を入念に練ったものの、生徒にとっては「ぶっつけ本番」という状態であり、マイクロ・ブログ投稿の際に、その手順にとまどっていた生徒が多かった。この問題に対処するためには、生徒を指導するサポーター役の十分な確保、および事前の投稿練習が有効であると考えられる。さらに、継続的な利用も重要である。可能ならば、毎授業時間に一定の時間を確保して授業の感想等を投稿させることも興味深い実践活動になるのではなかろうか。

また、中学生にはスマホの利用は時期尚早であるかもしれないが、それと同等の機能を持つ小型のタブレットを渡して、教員や生徒間のコミュニケーションツールとしてどのような可能性を持つか考えてみることも意義のある試みであろう。さらに、現在筆者達が計画している高校生に対するマイクロ・ブログの実践および過去に何度か行った大学講義におけるマイクロ・ブログの活用を、今回の実践と比較してみることも有益であると考えられる。

そして最後に、本稿に目を通していただいた内外の識者からの、今後の我々の実践における課題の提供を期待したい。

#### 参考文献

1. 文部科学省：“学習指導要領総則”（2014）
2. 米田貴：“SNSといじめ問題に対する高校での教育事例～予防・防止を目的としたロールプレイング授業の紹介～”，情報処理，Vol. 55, No. 7, pp. 746-749（2014）
3. WordPress：<http://wordpress.org/>（2014年6月1日採録）
4. WordPress > P2 << Free WordPress Themes：  
<https://wordpress.org/themes/p2>（2014年6月1日採録）
5. Burkun, Scott：“The Year Without Pants: WordPress.com and the Future of Work”，Jossey-Bass（2013）